

明らかにされたノモンハン航空戦の真実

穴沢 味光

一九三九（昭和一四年）五月九月 当

時の「満州国」とモンゴル人民共和国の間にあるハルビン・ゴール（ハルハ河）をめぐる国境紛争は、ささいな武力衝突から関東軍とソ連軍との激烈な局地戦争に発展した。この「ノモンハン事件」（ソ連側呼称「ハルハ河戦争」）は、スターリンのじきじきの命令で派遣されたジュエーフが現地日本側の第六軍の三倍にのぼる圧倒的な戦力を集中、八月下旬満を持した大攻勢に出ると日本軍はたちまち包囲分断され、主力の小松原兵団はその兵力の四分の三を失うという大敗北のうちに停戦になった。

「ノモンハン事件」での日本陸軍の地上部隊が奮戦空しく全敗したのに対し、こと航空戦に関しては、日本陸軍航空隊

は来襲する雲霞のごときソ連空軍に一步も譲らず、ほぼ五角の形勢の下に九月の停戦を迎えたといわれた。それまでの五ヶ月間にソ連機を撃墜撃破することなると一三七〇機、対する日本側の損害はわずか一六六機（うち未帰還六四機）、多くの撃墜王が輩出し、群がるソ連機をバツバツと撃墜する勇ましい空戦記が筆者をも含む「銃後」の読者を熱狂させたものである。

この陸軍航空隊のノモンハン神話は戦後かなり遅くまで広く信じられ、日本陸軍は地上では負けたが空では勝った——と一般におもわれていた。

ところが一九六四（昭和三九）年、ノモンハンの空戦当時、ソ連空軍第二二飛行連隊の政治委員であったア・ベ・ポロ

D・ネディアルコフ著／源田孝
監訳・解説

ノモンハン航空戦全史

A5判 二五〇頁

芙蓉書房出版「二、六二五円」

ジェイキンの『ノモンハン空戦記——ソ連空将の回想』（林克也・太田多耕訳、弘文堂）が出版された。ポロジェイキンの回想するノモンハン空戦の経過では、ソ連空軍はノモンハン戦の初期の段階ではたしかに日本空軍に敗北を重ねた。当時の空軍操縦員ははなはだしい訓練不足で、実践経験がなく、ソ連空軍の主力戦闘機ポリカルポフイー一六は運動性不良、日中戦線で実戦経験を積んだ操縦員が操る日本の軽捷な九七式戦闘機に翻弄される一方だった。だが、この頽勢は中央から急を聞いて派遣されたスペイン内戦や中国での派遣義勇軍の経験豊かな操縦員の指導で挽回された。イー一六は小回りが

利かない反面、機体が頑丈、操縦席には防弾鋼板が張ってあるのでかなりの被弾にも耐えられ、また高速急降下が可能である。この長所を生かし、日本機との格闘戦に入ることを避け、高空から急降下して一撃離脱する戦法が叩き込まれ、七月以降の後半の航空戦では戦況は有利に展開し、ついにソ連空軍の優勢の中に停戦に持ち込んだ、という。

この回想記には、日本側の空戦記のように、事件後半期にもソ連機が大量に撃墜され続けたとは述べられていない。そのため、この『ノモンハン空戦記』に対して、当時在世していたノモンハン空戦の参加者から、本書は事実を歪曲しているのではないかと、という。

るのではないかと——という激しい反論がなされたことを記憶している。たしかにボロジエイキンの回想記はソ連時代に書かれたものであるから、戦闘の経過や自軍の損害に関する具体的記述を避けており、なにか重要な事実を伏せているのではないかと——という疑念を拭えなかった。このように、ノモンハン航空線の真相に関しては日本側では詳しい経過が公表されているにもかかわらず、ソ連側の資料が未公表で、両軍の対戦記録を客観的に対照した研究ができず、ノモンハン事件研究に残された最後の空白となっていた。

しかるにソ連崩壊以来、ロシア側の資料

料公開でソ連軍から見たノモンハン事件の戦闘記録が次々と公表された。そして、この局地戦争は結果的には日本軍の敗北に終わったとはいえ、ソ連モンゴル側にとっても決してたやすい勝利ではなく、それどころか非常な難戦で、ソ連モンゴル側が払った犠牲は日本軍の損害を上回ったという事実がわかってきた。本書もそういった流れの一環で、ブルガリア空軍の現役の大佐が、これまで知られていなかったソ連空軍側の日々の戦闘記録を中心とし、これに既発表の日本軍側の記録と資料対照し、公平客観的な立場からノモンハン空の戦いの真実を追究した著作で、これまでの空白を埋める重

石川忠久著 茶をうたう詩

『詠茶詩録』詳解

茶についての全漢詩を味読する一冊！
中国の茶の詩の流れを踏まえ、すべての「茶をうたう詩」を網羅した館柳湾の『詠茶詩録』の全詩を年代順に訳出、解説する。8925円

清・洪昇著／竹村則行訳注 長生殿記

楊貴妃と玄宗の話を清代の洪昇が戯曲として完成させ、現代まで人気の高い『長生殿』を翻訳し注釈を付す。訳注者の長年の研究成果が随所に発揮される。7875円

竹村則行著 楊貴妃文学史研究

8925円
〈好評既刊〉

加古理一郎著 李商隱詩文論

8400円

小林武・佐藤豊著 清末功利思想と日本

7875円

王徳威著 三好章訳 叙事詩の時代の抒情

研文選書 24115円

西楨 偉著 響さあうテキスト

研文選書 2940円

豊子悦と
漱石、ハーン

研文出版

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/

要な研究である。ソフィアで刊行された英文の原版を改訂し、元航空自衛隊官の源田孝氏がくわしい補足資料を付録に追加している。

結論からいえば、日本軍が公表した戦績は途方もない誇大戦果で、実際のソ連空軍の損害は二〇七機に過ぎなかった。

しかし、誇大戦果に関して言えば、ソ連側とても同じで実際の日本側の損害の四倍近い数値(六六〇機)を公表していた。

両軍ともに互いに相手の兵力を実際の何倍にも見積もり、基地に帰還した搭乗員が申告した戦果を鵜呑みにし、これを半ば宣伝目的で公表、幻の勝利をでっち上げていたのである。ポロジェイキンの回想記は大筋では嘘ではなかったのである。

たしかにソ連空軍にとってノモンハンに展開した日本陸軍航空隊はおそるべき強敵であった。事件勃発当初から停戦に至るまで前線のソ連空軍は数的には日本軍の二―三倍の絶対優勢であったが、日本軍の機材はI―一五改・I―一六、I―一五三(チャイカ)やSB―2爆撃機

などよりも優れ、操縦員は精強で士気が高く、兵力では圧倒的に優勢なソ連空軍を向こうにまわして互角に戦った。

スペイン内戦でのソ連義勇軍の失敗に続いて東方で日本に敗北すればソ連の威信にかかわる。この危機に際してウオロシロフ国防人民委員の特命によってスペイン内戦や中国での義勇軍での実戦経験のある操縦員が極秘裏に急速選抜召集され、輸送機でモンゴル前線に送り込まれた。さらに追加して海軍航空隊からもベテランの操縦員が派遣されてきた。ポロジェイキンが述べたように彼らによってソ連機の頑丈さを生かした集団空戦、一撃離脱の戦技がたたきこまれた。さらに機材そのものも改良された。主力機I―一六のエンジン換装、火力の強化、耐弾性の改善、ロケット砲の実験的使用、複葉引つ込み脚の新戦闘機I―一五三の投入(これは期待はずれだった)など新機軸が次々に試みられたが、これだけでは理想的な軽戦闘機であった九七式戦闘機の優位を覆すには十分ではなかった。

ノモンハン航空線で最終的にソ連側が戦場上空の制空権を握るに至った理由とは、結局ソ連側が航空機と人員の予備を十分に確保できる能力があったのに対して、日本側にはその余裕がなかったことであつた。当時日本軍は日中戦争の前線にも航空兵力を派遣しており、九七戦の生産量は月産わずかに三八機、操縦員の養成は少数精鋭主義で前線にはベテランが揃っていたが、彼らが死傷すれば補充すべき要員がいなかった。近代航空戦は大変な消耗戦で、機材と人員の莫大な消耗を伴い、これを補充出来る側が最後に勝利する。

ノモンハンの草原は高緯度で事件の起こった夏季は夜が短く、兵士は猛烈な蚊とブユの襲来で睡眠不足に悩まされた。長い昼間を通じて、量を頼み「空のバルトコンペーア」戦法で戦場上空に絶えず戦闘機と爆撃機を送り込むソ連軍、これを迎撃する日本軍戦闘機の出撃回数は日に五―七回にも達するありさま。事件後半期には日本空軍の基地もソ連軍の低空

襲撃で損害を蒙ることがあり、地上についても安心はできない。また夜になると旧式四発重爆TB3が盲爆にやってきて安眠を妨害する。こうして日本軍機搭乗員のストレスと疲労は日々蓄積、耐えうる限界を超えた。事件後半期の七月以降、過労のため日本側操縦員の消耗がうなぎのぼりになり、陸軍航空の将来になう将校クラスの有能な人材が次々と戦死、後の太平洋戦争での陸軍航空作戦の大きな障害になった。これらの作戦は航空作戦の意味をよく理解したソ連空軍が日本空軍を消耗させるために意図的に仕組んだものであった。これに対する日本軍はまず敵の空軍を爆破して制空権を奪う「航空撃滅戦」を優先し、六月二八日奥地のタムスク基地を攻撃、一時的に戦場の制空権を奪った。だが、軍事衝突の拡大を危惧する大本営によってしばらく戦線後背の敵基地攻撃を禁止されたために、作戦を徹底できず、次第に増強されるソ連空軍との消耗戦に引きずりこまれ、地上部隊作戦への協力もままならず、

関東軍大敗の一因となった。

八月のジューコフ攻勢で日本の第六軍が壊滅敵な敗北を喫した後、地上戦での敗勢をせめて空中で挽回しようと、日本陸軍は躍起になって中国戦線や内地（本土）から動員できる限りの航空兵力をかき集めてノモンハンに投入した。その中にはまだ実戦経験の乏しい戦隊や旧式複葉の九五式戦闘機の戦隊までであった。しかし、日本陸軍の総力を振り絞って約二五〇機体あまりを集めても、ノモンハンに派遣されたソ連軍五八〇機には及ばず、九月一五日まで行われた最後の航空線での日本軍の損害はソ連軍を上回り、敗勢の挽回はならなかった。

ノモンハン事件そのものは、大本営の意図を無視して現地の関東軍の参謀たちが無謀にも挑発した局地戦であり、戦争の目的や作戦目標に関して、現地軍と中央の意思の統一がまるでなかってなかったことは、これまでの日本側の研究でよく知られている。これに対してソ連軍では戦争の目的や作戦に関して明確な目標が

あり、そのことが初期の航空作成の不利を転換できた理由であった。

しかし、地上戦の場合と同様、停戦後に航空線での徹底的な反省は陸軍ではなされなかった。そして九七戦が大活躍してソ連機を一方的に墜しまくったという神話が一人歩きし、太平洋戦争後半期に連合国の空軍に敗北する素地を作ってしまったのである。本書はソ連側から見たノモンハン事件の事実関係を公平客観的に叙述した基本的な戦史資料としてマクシム・コロミエツ『ノモンハン戦車戦』（大日本絵画）と並んで現代史研究者が必ず参照すべき著作である。

（あなざわ・わこう 福島県文化事業団専門委員）

